



昨年末、小学校時代の恩師の死を知らせる葉書が届いた。「〇月頃から口がまわらなくなり△月××日に検査入院しました。筋萎縮性側索硬化症（ALS）と診断され、何の手立ても出来ぬまま□月◇◇日に帰らぬ人となりました。いい思い出を沢山いただき感謝しております。ありがとうございます。享年81歳」小学生時代の後半2年数カ月間担任としてお世話になった〇先生の凄惨な最期が文面からくみ取ることができた。

先生のお宅に焼香にお伺いしようと、雪が舞い始めた師走のある日、道央高速道路を北上し、旭川に向かったが、滝川あたりから豪

急増する嚥下障害・誤嚥性肺炎・認知症

情報広報部 橋本 洋一

雪のため視界不良となり、予定した時間を大幅に遅れご迷惑をおかけしたが、なんとか焼香することができた。嚥下障害のため、胃瘻造設が予定されていたが、呼吸筋麻痺が進行し、胃瘻造設が断念されたままお亡くなりになったとのこと。「胃瘻を造らなくてよかったです」ぼつりと言われた奥さんの言葉が心に残った。

時間の合間をぬって、故郷である道北のW町を訪ねた。母の姉である伯母が住んでいる町営住宅を訪ねると、地元の高齢者ホームに入所しているとのこと。取るものも取りあえず、老人ホームの伯母の部屋を訪ねると、窓

側のベッドで静かに横たわっていた。私の顔をみても当初、怪訝そうな顔つきであったが、ホームの職員の「〇〇さん、橋本さんが来てくれたよ」という言葉に誘導されたように「わざわざ来てくれてありがとう。大丈夫だから。今、ただ、横になつていなければならぬのでこうしているだけだから。大丈夫。大丈夫」その後、《大丈夫》の連発が続いた。伯母は私が誰なのか記憶として残っていないが、身近な存在ではあると思っているようだった。心配をかけたくないといった配慮と取り繕いが、《大丈夫》といった言葉に滲み出ていた。「食事はむせることなく食べられております。時々、尿失禁をされますけれど」と介助していた方々の説明があった。

お誕生日、おめでとう。大正〇年△△月××日 98歳」と枕元の壁に書かれた文字を見ながら、「伯母さんはがんで亡くなった私のお袋より40年も長く生きてきたんだ」と思った。伯母は結婚後数年で夫を病死で失い、その後、保険外交員として活躍しながら、女手一つで2人の子ども達を育ててきた。虚弱な母とは対照的で、伯母は明るく活発な性格の持ち主であった。帰る間際まで私が誰か思いあぐねているようにも見えたが、口からは《大丈夫》の言葉が出てくるだけであった。「伯母さん、元気でね」その一言を言うのがやっとであった。涙がじわっと滲んで視界がぼやけ

た。この6年間の年月はあまりに長いものであった。この伯母が嚥下困難になったら、私の従兄弟はどう判断するだろうかと思つた。

ここ最近、日常の診療をしていて誤嚥性肺炎で外来を受診される認知症を伴った後期高齢の患者さんが急増していることを実感する。重度の嚥下障害を有する認知症の人にとって、食べることは命をかけることなのだ。自然と嚥下造影検査（VF）や嚥下内視鏡検査（VE）を行う回数が増えている。肺炎による死亡数が脳卒中と入れ替わって3位となり、今後、現在の2・8倍まで増加すると産業医大の松田教授も想定している。【医療・介護関連肺炎：Nursing and Healthcare-associated pneumonia】の診療ガイドラインが2012年、日本呼吸器学会により作成された。CAPによる入院肺炎の6割以上が誤嚥性肺炎との報告もみられる。

一時マスキングで胃瘻造設が悪者扱いされ、日本老年医学会でも積極的な胃瘻造設は控えようとする声明が出された。そういった経緯をへて、安易な胃瘻造設を防止しようと、ある一定以上の回数の胃瘻造設に対して遅減制が設けられたが、こういった制限も釈然としない点が存在する。

ワイン会終了後、帰宅してうたた寝した後で、突然目が覚め、慌てて赤ワインを口に含んだら、気管にワインを誤飲しそうになった。持ち前の反射神経？で、あわよく誤嚥性肺炎から免れることができた。数年後に前期高齢者の仲間入りをする私にも誤嚥性肺炎のリスクがここまで来ていると実感した2015年の新年である。